

# 学習意欲と授業についての考察

## — theory and practice —

児島 千珠代

### 要旨

本研究の目的は、授業において、学生がどのように学習意欲を高めたり、減退させたりするのかを調査し、言語学習の過程に影響を与える要因を探求することである。

第二言語習得の成功に影響を与えるとされている、学習者の個人差、学習意欲に関する研究や、外国語学習成功者の研究を概観した上で、実際の授業において、何が学生の学習意欲を高めたのか、あるいは減退させたのかを、記述式アンケートによって調査した。一方、教師が同じ方法を取り入れて授業をする時、あるクラスでは学生の学習意欲を高められても、他のクラスで、その効果が上がらないことがあるのは、一般に経験されることである。これについて、英語能力の異なる三つのグループの学生の記述から、英語能力の高いグループと低いグループで、学習意欲が高まる要因が異なるか否かを考察した。調査結果から、英語能力が低いグループは「理解できた」ことによって学習意欲が高まり、英語能力の高いグループでは「英語を使う」ことで学習意欲が増すことが明らかになった。

### Learners' motivation in the classroom: theory and practice

Chizuyo Kojima

### Abstract

The aim of this study was to investigate learners' motivation in the classroom and to explore related issues that are likely to influence on the process of learning of a language. The paper gives an overview of previous research into individual differences, motivation and good language learners. The research was carried out within an interpretive paradigm using qualitative methods in order to find out what motivated or demotivated students in the classroom. Data were collected from three groups of students using open-ended questionnaires. Participants were made up from three groups based on their ability with English: novice, intermediate and expert students. The findings revealed that students' classroom experience was affected by various factors. The paper also discusses similarities and differences in the answers of the three groups to open-ended questionnaires. The results indicate that less competent learners were motivated when they were able to understand English, whereas competent learners appreciated using English in class.

## 1. 研究の背景

教師にとって「授業がうまくいった」と思えるのは、学生が目を輝かせて話を聞いている時、積極的に質問しようとしたり、発言しようとしたりする時、ペアワークやグループワークを活発にしている時などである。すなわち、教師が満足できる授業とは、学生が学習意欲を高め、将来的に自律学習者 (autonomous learners) に成長するべく道筋をつけられるようなものである。しかしながら、教師が意図したことが学生に的確に伝わることもあれば、伝わらずに学習意欲が上がらないこともある。反対に、教師があまり意識せずにしていたことが、学生の学習意欲を高めることもある。

以上の観点から、どのような授業をして、授業中に何を心がけたら、学生の学習意欲が高まるのか、あるいは学習意欲が低下するのかを振り返ってみたいと思う。そのために、言語学習についての、主に心理的な側面からの研究に注目したい。

第二言語習得研究 (second language acquisition research) は、(1) 言語習得における普遍的な原理・原則を明らかにしようとする研究、(2) そのような原理・原則だけでは説明できない学習者の多様性を明らかにし、どうすれば習得に成功する人が増えたり、効率よく習得できたりするのかという教育的立場からの研究、に大別できる。本稿では、後者の研究の一部を概観する。

## 2. 先行研究

20世紀の末から応用言語学では、教授方法が学習成果に影響を与えるという教師中心の考え方から、学習者に注目した学習者中心の教育へと関心が移り始めた。この分野には、学習者の個人差 (individual differences)、個人差の一つでもある学習意欲 (motivation)、学習意欲が一つの要因として作用するとされる外国語学習成功者の研究 (The good language-learner model) などがある (Skehan 1989)。これらの研究は切り離すことが困難であり、相互に影響を与え合う分野である

### 2.1 個人差 (individual differences)

第二言語習得研究の多くは、「学習者の言語習得を調べれば、万人に通じる習得過程の知見を得ることができる」という前提に立って行われてきたが、Ellis (1994) は「昔からの研究の考え方として、個々の学習者が、習得する速度や過程において大きく異なるということを認識している研究姿勢もある」と主張している。学習者はそれぞれ異なる方法で、第二言語を習得しようとするが、それは様々な個人差 (individual differences) 要因に影響を受けているのである。Dörnyei (2005) は、個人差の概念は、主要な要因と共にその他多くの要因を含むものであるとはしながらも、6種類のカテゴリーに分類している。す

なわち、性格 (personality)、才能 (ability/aptitude)、学習意欲 (motivation)、学習スタイル (learning styles)、学習ストラテジー (language learning strategies)、学習者のその他の特性 (other learner characteristics) である。最後の学習者のその他の特性は、さらに5種類の要因に分けられる。不安 (anxiety)、自尊心 (self-esteem)、創造性 (creativity)、進んでコミュニケーションをとる態度 (willingness to communicate)、学習者のビリーフ (learner beliefs) である。学習者のビリーフについては (児島 2015) で概観したが、これら五つの要因は、影響が少ないように見えても、実は第二言語習得の過程で重要な要因と考えられている (Williams and Burden 1997)。たとえば、不安 (anxiety) を引き起こすような環境においては、「覚えているはずのことが出てこない」など言語運用に影響を与えることは、疑問の余地がない (Dörnyei 2005)。

第二言語習得の成果は、成功するものから、途中で挫折するものまで様々であるが、この成果を左右するものは、個人差 (individual differences) であることが多い (Dörnyei 2005)。個人差の要因は、変えることのできないもの (年齢、才能など) と、変えることのできるもの (学習意欲など) に分けることができる (Ellis 1994)。外国語習得の才能は生まれつきのものだと考えられがちであるが、Dörnyei (2005) は、「厳密に言えば、語学の才能というものには存在せず、外国語習得を容易にする学習者能力と呼ぶことのできる多数の認知的要因 (cognitive factors) を、人間は持っている」と主張する。このことについて、Skehan (1989) は、「語学の才能が生まれつきのものか、あるいは三歳までの環境に影響されるのかは、明らかではない」という見解を示しているが、Grigorenko, E., Sternberg, R., & Ehrman, M. E. (2000) らは、「語学の能力は、生まれた時に決まるのではなく、知識や技術を積み重ねていくものと考えられる」と主張している。

30年以上前に、Krashen (1981) と McLaughlin (1978) は、第二言語習得の過程に関して、異なる見解を示した。Krashen は「目標言語を使用することによって、無意識のうちに習得できる」と論じたのに対して、McLaughlin は「目標言語を自動的に使えるようになるためには、意識的な学習が必要である」と主張した。この論争に対して Schumann (1983) は、「第二言語習得の過程は、個人個人によって異なる」と論じ、「文法を意識的に学習したほうが容易に感じる学習者もいるだろうし、言語を使うことによって熟達すると感じる学習者もいるだろう」としている。

## 2.2 学習意欲 (motivation)

英語の motivation は一般に「動機付け」と訳されているが、本稿では「学習意欲」「やる気」として捉える。

学習者の動機、学習意欲についての研究は、1960年代から第二言語習得研究の中で盛んに研究されてきた分野である。初期は、学習意欲の定義や中身を研究することが中心だったが、最近では、学習意欲を実際の授業の場でどのように生かせるか、ということに

関心が高まってきた (Dörnyei 2005)。

学習意欲 (motivation) は、学習者の個人差要因の中で最も学習に影響を与えるものの一つとされている。学習意欲を認知的な面から考えると、最も重要なことは、学習者が自分自身の目標を設定し、その目標を達成するためにどのように行動するかを自分で決めることである (Williams and Burden 1997)。どのように学習意欲が高まるかは、個人個人によって異なり、たとえば教室では、「友達」「先生」「自信」などの要因が、学習意欲に影響を与える (Ellis 1994)。

学習意欲が、さまざまな要因に影響を受けて多くの側面を持つものだという事は明らかだが、これを Dörnyei (1994) は、言語レベル、学習者レベル、状況レベルという3種類のレベルに分類した。それぞれのレベルにおける影響を与える要因として、言語レベルでは「その言語が役に立つかどうかという感じ方」、学習者レベルでは「自信」「達成欲求」、状況レベルでは「先生」「クラスの雰囲気、人間関係」などが挙げられている。

### 2.3 外国語学習成功者 (good language learners)

「外国語学習成功者」を定義することは難しい。会話が流暢な学習者が、必ずしも文法能力が高く書くことが得意とは限らないし、逆もまたあり得る。文法の正確さを気にしすぎる学習者は、発話をためらい流暢さに欠ける (Krashen 1981)。しかし、外国語の習得が早い学習者が存在する一方で、なかなか進歩しない学習者もいることから、何らかの個人差要因が言語習得過程に影響を与えると考えられている。

言語習得過程に影響を与える2種類の領域を Tarone & Yule (1989) は次のように示している。すなわち、感情的領域 (affective domain) と知識的領域 (knowledge domain) であり、感情的領域には、態度 (attitude)、学習意欲 (motivation)、自信 (self-confidence)、不安 (anxiety) などが含まれる。これらのうち自信 (self-confidence) は、言語習得過程でたびたび起こる「つまずき」を乗り越えるための重要な要因である。

イギリスで勉強していた4人の外国語学習成功者についての調査 (Kojima 2008) から、以下のようなことが明らかになった。外国語学習に対する考えや態度としては、「その言語を積極的に使おうとする」「完璧主義をやめ、間違うことを恐れない」「イギリス英語、イギリス文化に対するあこがれ」という共通点が見られた。一方、実際の学習方法での共通点としては「単語を覚える時、丸暗記はせずに文の中で使ってみる」「読む時は、できるだけ辞書を使わず、わからない単語は推測する」「イギリス滞在中、日本語を使わないようにする」等があった。言語学習成功には、その言語を話す人々に対する態度が影響を及ぼすと Gardner (1985) は主張し、その言語の文化や話す人々へのあこがれが、学習意欲につながると論じている。これは、「イギリス英語、イギリス文化に対するあこがれ」という調査結果と一致した。

### 3. 理論的視点 (theoretical perspective)

理論的視点とは、研究手法や方法論ではなく、「世の中をどのように見て理解するかという認識論」の違いであり、それぞれ特徴を持っている（児島 2015）。研究者が立つ理論的視点は、実証主義的視点 (scientific paradigm)、解釈主義的視点 (interpretive paradigm)、批判主義的視点 (critical paradigm) の三つに分類される (Crotty 1998)。本研究は、これらのうち解釈主義的視点 (interpretive paradigm) を立ち位置とする。これは、人間の行動を解釈し、理解しようとする理論的視点である。概念の世界において、客観的な知識は存在せず、主観的解釈を通して、人間の行動の意味を捉えるという考え方である。

この解釈主義的視点で研究を行う場合、アンケート調査やインタビューなどの研究手法が用いられることが多い。特に事例研究 (case study) では、多項選択式のアンケートより、記述式のアンケート調査のほうが適している。これは、研究対象となる個人個人の考えを理解するための意義深いデータが得られるからである (Cohen, Manion, and Morrison 2000)。多人数の被験者から数値的な結果を得るための多項選択式アンケート調査に対して、より少ない人数に対する記述式アンケート調査は、研究対象それぞれの言葉による表現を重要視し、量的より質的な結果を求める研究に用いられる。このような研究は、研究対象者の一般的傾向を解明することを目指しているのではなく、特定の対象者グループの特徴や問題点を探求することを目的としている。この観点に立つ研究分野は、解釈主義的な認識論が適していると考えられている。

### 4. 研究課題

学習意欲と授業について、質的研究方法で調査し解釈するために、次の二つの研究課題を設定した。

- 1) 授業において、学生が学習意欲を高める要因、学習意欲を下げる要因は何か。
- 2) 英語能力の高いグループと低いグループで、授業において学習意欲が高まる要因は異なるのか。

### 5. 調査対象

次の三つのグループを調査対象とし、4月から7月までの前期授業期間における学生の学習意欲について調査した。

三つのグループは、すべて同じ大学ではないため、英語能力別の分類が正確だとは言いきれないが、授業や小テストをする教員側から見た学生の英語能力の違いは、一目瞭然で

ある。学生の英語能力を示す試験結果を聴取したが、英語能力試験も英語検定試験も受けてない学生も多かった。試験結果がわかっている学生の英語検定試験は下記のとおりであるが、中学時代に受験して以来受験していない学生は現在の英語能力は不明なので、参考程度のデータである。英語能力が中程度の学生の英語検定試験の結果は不明であるが、プレイスメントテストで学年全体の中間程度のグループであり、本研究では三つのグループの中間に相当する。

- 1) 英語能力が低い学生 (以下 novice)                      大学1年生 女子    23人  
(英検準2級:9% 3級:35% 4級:17% 不明:39%)
- 2) 英語能力が中程度の学生 (以下 intermediate)        大学2年生 女子    23人
- 3) 英語能力が高い学生 (以下 expert)                    大学1年生~4年生 40人  
(男子28人 女子12人)  
(英検1級:3% 準1級:8% 2級:23% 不明:53%)

それぞれのグループの特徴と授業方法についての説明はつぎのとおりである。

1) novice

女子大学の英語必修科目で、英語プレイスメントテストの成績によって分けられた下位のクラスである。英語の苦手意識が強く、中学校英語の文法も忘れていている学生が多い。

テキストは、基礎的な文法と会話が中心であるが、テキスト以外に、A4用紙1枚程度の英語原稿を書き、できるだけ原稿を見ないでプレゼンテーションをすることを課した。あまり原稿を見ないで発表できる学生は少数であり、極度に緊張している学生が多く見られた。プレゼンテーションを終えたあとの質疑応答は、初めは英語でさせたが、英語で表現することが困難だったため、日本語使用も認めた。

原稿を書いておこなうプレゼンテーションとは別に、準備なしで1分程度「休み中にしたこと」を英語でスピーチする機会を与えた。

授業は、たまに英語を使用した。ほとんどの説明は日本語で行った。

2) intermediate

女子大学の英語必修科目で、英語プレイスメントテストの成績では中程度の学生が多いが、授業が始まる時「どうせ私たちは英語のできないクラスだ」と口に出していた。その考えを修正するために、「1回のテスト結果だけなので、上のクラスと大して差はないはずである」ということと、「必修英語はこれが最後なので、英語をわかるようになる最後のチャンスである」ということを、初回の授業で強調した。

テキストは、アメリカの文化、慣習、考え方について書かれた内容であるため、読む時には「日本ではどうか？具体例としては、どのようなことがあるか？」を常に考えながら読解するように指導した。また、高校までは「単語だけ調べて何となく意味がわかる」だけの読み方だったと自認していたので、主語、動詞や、品詞を確認することを徹底した。

テキスト以外に、A4用紙1枚程度の英語原稿を書き、できるだけ原稿を見ないでプレゼンテーションをさせたが、ほとんどの学生は、あまり原稿を見ずにアイコンタクトをとって、聴衆に伝えようとする発表だった。質疑応答は、できる限り英語でさせた。プレゼンテーションに対する学生のコメントは日本語で書かせ、教員がチェックした上で、書いた人の名前部分は切り取って、プレゼンテーションをした本人に渡した。

予習復習を徹底させるために、毎回、前回の授業と今回の授業の範囲から小テストをした。また、リスニング練習も兼ねて、前回授業した部分をテキスト付属のテープでテキストを閉じて聞かせた後、内容について英語で質問し、英語で答えさせた。この時間は、英語だけを使用して内容を確認するため、学生は「英語を使っている」と実感できたようである。また、すでに授業で理解した英文をリスニングすることは、「リスニングしてわかる」体験になったと考えられる。

授業は3割程度英語を使用し、文法説明、文化や慣習についての話し合いは日本語でおこなった。

### 3) expert

名門といわれる私立大学の中級クラスで、必修科目のクラス24名と選択科目のクラス16名の二つのクラスであるが、学生の英語能力や授業内容は同じなので、本調査では、40名の一つのグループとして扱う。筆記試験での英語力は高いが、英語を話す機会はほとんどないグループである。

授業はすべて英語で行い、授業後の質問も日本語を使わないこととした。テキストは、身近にある科学的なトピックで、それに関するテーマについて、A4用紙1枚程度の英語原稿を書き、できるだけ原稿を見ないでプレゼンテーションと質疑応答をさせた。プレゼンテーションに対する学生のコメントは英語で書かせ、教員がチェックした上で、書いた人の名前部分は切り取ってプレゼンテーションをした本人に渡した。

テキストの読解は、難しい単語やわかりにくい部分を簡単な英語で説明させたり、パラグラフごとにグループで要約させたりする方法をとった。

## 6. 調査方法

研究手法の中で、インタビューは、記述式アンケートより詳細なデータを得られる可能性が高いが、倫理的問題点も指摘されている (Cohen et al. 2000)。すなわち、授業を受けている学生の場合は、より時間的拘束や負担も多くなる。このことから、本研究では記述式アンケートをもって調査方法とした。

前期の授業終了後に、novice と intermediate には、下記の記述式アンケートを実施した。expert は、授業について自由に記述をさせ、これらの記述をデータとした。授業は英語でおこなっている expert も、日本語で書くように指示した。

[novice と intermediate に実施した記述式アンケート]

4月からのこの授業を振り返って、英語学習について考えてみてください。

- ①どんな時に英語に対する「やる気」が出たか (例:文法がわかった時、先生の言葉、予習して授業で発言できた時、など) 書いてください。また、その「やる気」は、どのくらい続きましたか? 「やる気」が出たり、なくなったりしましたか? どんな時に「やる気」がなくなりましたか?
- ②この授業で、今までの英語学習についての考え方や学習方法が変わったことがありますか? もしあれば、どんな時にどのように変わったか、くわしく書いてください。

## 7. 調査結果

解釈主義的視点 (interpretive paradigm) での質的研究であることから、調査結果の概要を述べた上で、「学生の生の声」を匿名で記す。記述された内容は、内容分析してコードに分類した。その結果、novice のコードは「理解できた」の1分類、intermediate のコードは「理解できた」「クラスの雰囲気」「良い点数をとる」「達成感」の4分類、expert のコードは「英語を使う」「プレゼンテーション」「クラスの雰囲気」の3分類とし、それぞれ表にまとめた (表1、表2、表3参照)。記述式アンケートを実施した novice と intermediate は、①②に記入してある場合、①やる気について、②英語学習についての考え方や学習方法が変わったこと、という順で提示する。各グループとも、詳しく学習意欲を説明していない記述は除いたため、提示する学生のコメント数は、novice 9件、intermediate 17件、expert 11件である。

### 7.1 調査結果 novice

「予習して問題ができた時」「文法がわかった時」「先生の話す英語がわかった時」などに、やる気が出たというコメントが一番多く、19件 (83%) あった。「基礎が抜けているとわかっ

た時」「アメリカ英語とイギリス英語の違いを知った時」「どんなことでも質問できると思った時」などの記述も見られた。逆に、やる気がなくなるのは、「小テストの点数が悪い時」「理解できない時」などである。

プレゼンテーションに関しては、原稿を書いておこなうプレゼンテーションと、準備なしの1分程度のスピーチで、全く逆の結果が出た。原稿を書くプレゼンテーションは、やりたいのは3人(13%)だけだったのに対して、準備なしのスピーチをやりたいというコメントは16人(70%)もいた。短いスピーチなら、英語能力があまり高くない学生でも、話すことも聞くことも、理解しやすいからだと考えられる。

表1. novice の調査結果

コード	学生	学生の記述
理解できた	A	①文法がわかった時。先生の発言。このクラスなら、どんなことでも理解できなかったら、質問できるから。 ②前に進むばかりではなく、わからないところを掘り返して学ぶことが大切だと思った。
	B	①先生の英語で話している内容が自分で理解できた時は、とても「やる気」がおこった。その「やる気」は授業一つ分続く。 ②先生が言っていたように、海外の映画を見る際は、必ず字幕にするように変えた。そうすると、単語の意味などが理解できるようになった。
	C	①英問英答で、質問がしっかりと理解でき、しっかりと答えられた時、英語に対してのやる気が出る。だけど、ほとんど理解できないことが多いので、すぐにやる気がなくなる。
	D	①当てられた問題を正確に答えられた時にやる気が出た。 ②前よりも、基礎を強化しようと考えられるようになった。
	E	①文法がわかった時や、頭の中で日本語を英文にできた時などの、自分の力でできた時。やる気はそこまで長く続かなかった。やる気は、出たりなくなったりする。考えてもわからない時など、なくなる。
	F	①わからなかったことを理解できた時。テレビで旅行の番組を見た時。単語を覚えられなくて小テストの点数が低かった時は、やる気がなくなった。 ②基礎をきちんと身につけようと思うようになった。先生の言葉をノートにメモする習慣がついた。
	G	①リスニングで流れてくる言葉を理解できた時。 ②授業が丁寧なので一つ一つをしっかりと学び、基礎的なものの考え方がわかるようになった。
	H	①問題に正解した時、その回の授業が終わるまで続く。テスト前はやる気がなくなる。絶望感が増える。 ②あの日本語って何て言うんだろうとふと思って、調べたり親に聞くようになった。
	I	①わからない文法や単語がある時に、先生が教えてくれた時。 ②英語が少し楽しくなった。興味がわいてきた。

## 7.2 調査結果 intermediate

このグループは、学生のやる気が高まっていることが教師の立場から見て感じられたクラスである。「英語の文章や文法がわかった時」にやる気が出たというコメントが9件(39%)と多かったが、「クラスの雰囲気が良くてみんなが積極的だから」というコメントも5件(22%)あった。教師の予想以上に学生のやる気を刺激したのは、最初の授業で「これが大学生活で最後の必修英語なので、英語をやり直す最後のチャンスだ」と話したこと

だった。また、「教師がほめてくれること」で、やる気が出たと書いている学生の記述も3件(13%)見られた。やる気をなくすのは、「予習ができてない時」「テストの点数が悪い時」などであった。

表2. intermediate の調査結果

コード	学生	学生の記述
理解できた	J	①予習した時には全く理解できなかったところを授業で細かく整理して考えた時に、その部分だけでなく全体の話がわかるようになった時「そういうことか!」と感動したし、やる気につながった。反対に、一人で予習していて、じっくりやる訳し方がなかなか出てこない時、やる気がなくなった。 ②この授業を受けて、英語を理解するには、時制や品詞を一つ一つクリアにして読んでいかないと正しい答えに導けないということに改めて気づいた。私は、流し読みをしてしまうクセがあるので、ちゃんと丁寧に読むように心がけるようになった。
	K	①先生がイギリスで生活していた時の話を聞いた時に、実際に使うのだと思い、現実味が湧き、これを覚えたら先生のように話せるようになれると思えた時。予習をして授業に取り組み、内容を完璧に理解できた経験が積み重なり、予習することが日課になっている時にやる気があることを実感してやる気が出る。今でも続いているつもり。 ②先生が最初のほうに「予習」を強調していて、久しぶりに予習をしたら、今までの予習のイメージは「わからなくて面白くない」だったが、授業での理解度が深まるし、じっくりと英文を読むことのできるチャンスだなと思うようになった。
	L	①やる気が出た時は、テストがあるから予習をしていったら、それまで全くわからなかった英語の文章などが、すんなり理解できるようになったのがきっかけで、そこから、どんどん勉強していった。また、先生の和訳の仕方が好きで、きっちりとした日本語をそのまま書き取るのではなく、英語の文章があったら、自分で後で訳せるように書き取ることがやる気につながった。やる気は、ずっと続いた。 ②今までは、単語がわかっても英語の文章がわからなかったが、上記のやり方で訳を書き取りだしてから、どの授業の英語の文章も理解できるようになった。この授業をきっかけに、他の授業でも積極的に予習復習をしていくようになった。この授業で、本当に英語に対する意識が変わった。
	M	①予習して行った時は、自力では理解できなかった部分を、先生が詳しく解説してくださっているのを聞いて、とてもやる気が起きた。そのやる気は、授業中ずっと続いていたと思う。反対に、予習をしていかなかったり、他の授業での課題に追われ、どうしようもなく疲れている時は、一日を通してやる気を失ってしまったように感じる。 ②私にとってこの授業は、テストのための勉強ではなく、テキストや友達のプレゼンから多文化を学び知識を増やすことのできたものだった。もちろん、文法や単語を頭にたたきこむことも必要ですが、純粹に違う国や地域の文化、習慣に対して驚いたり、おもしろい!と思うことができた。内容に興味を持つと、テキストを読むのも楽しくなった。
N	①となりの人と例文を作り、みんなの前で発表した時。よりその単語の使い方を理解することができたから。教科書を、最後時間がなくなればぱっと通した時に、やる気がなくなったし、理解が中途半端になってしまった。例を挙げながら、皆と一緒に理解していく先生のスタイルが大好きなので!! ②以前までの英語学習は、テスト前に単語を丸暗記してテストの後にはすぐ忘れてしまうという学習方法だった。あまり英語を理解できずに終えていたので、いつのまにか英語が不得意になっていた。しかし、今回の授業では①にも書いたが、クラス皆で例文を考えたり、文化について先生の経験談やクラスの皆の経験談など、楽しく英語を学ぶことができた。元々、英語が大嫌いで、見るのも嫌なくらいだったが、今回の授業を通して、あ、これ授業でやったな、など、少し英語を好きになったような気がした。	

理解できた	O	<p>①授業のテキストの内容がとても面白かったので、早く内容を知りたいと思ったことが「やる気」に大きくつながったと思う。また、授業中に文法が理解できたり、予習してわからなかった部分をきちんと納得して理解できると、さらなるモチベーションにつながった。</p> <p>②先生が「主語、動詞を意識して」とよく言っていたことから、勉強する際にはSVをまず探すことから始めるようになった。そうすると、大まかな文の構造が理解できるようになるので、細かいところはわからなくても文の流れは読み取りやすくなった。</p>
	P	<p>①やる気が出たのは、文法がわかって、あやふやだった言葉がつながって、ちゃんと理解できた時、教科書で2～3文くらい連続でわからない単語がなくてスラスラ読めた時、リスニングが8割くらい聞き取れた時。</p> <p>②SVをさがして、ウヤマヤに訳さず、すべてキチンと日本語訳にしようという気になった。</p>
	Q	<p>①こんがらがっていたところ(訳や文法)がわかった時に、意欲がわいた。先生が、このクラスのことをほめてくれ、丁寧に教えてくださるので、やる気が出た。</p> <p>②-ous, -ion, -ly など、これがつくと名詞になる、形容詞になる、など知ることができたので、辞書で調べなくてもいい時があった。</p>
クラスの雰囲気	R	<p>①予習する時間をきちんと取り授業にのぞんだ時にやる気が出た。逆に、予習などができなかった場合の授業は、内容をくみ取ること必死で、自分にとって良い影響を及ぼしていないと感じた。また、皆の前で問題に答える時、先生が学生に対して威圧感を与えず「間違っても大丈夫」という雰囲気にしてくださったことによって、自信とやる気をつけることができた。</p> <p>②今までの英語の授業は「間違えたらどうしよう」という緊張感で、英語に対する苦手意識が強かったが、クラスの雰囲気と先生のご指導もあり、英語を楽しむながら学習できるようになった。また、予習テスト復習テストの制度の影響もあってか常に英語の授業に対するモチベーションを保つことができた。嫌々やるのではなく、テストとクラスの雰囲気が相まって私にとって良い時間だった。</p>
	S	<p>①みんなが発言しながら楽しく授業を受けた時。仲が良いことって英語の学習に意外と大事だと思う。わからないところを教えあったり、発表を聞いて理解しあおうとしたり、そんな環境が私たち居ごち良くて、来たいと思える場所、雰囲気だったから、やる気につながったのだと思う。</p> <p>②携帯のアプリで、電車の中で英文を読むようになった。一緒に学ぶ友人たちがスキルアップしていくのを一緒にいて感じるから、自分も頑張りたいと思うようになった。先生が親身に教えてくれることもキッカケのひとつ。</p>
	T	<p>①クラスの学生が、前回までの内容を英語でスムーズに説明した時、同じクラスの学生ができるのだから、私も！とやる気が出た。先生が「クラスのレベルなんて気にするものではない！」と言ってくださったのも、やる気につながった。教科書を忘れた時、疲れていた時は、やる気がでなかった。</p> <p>②授業でプレゼンをしたことで自分の頭にある英語だけで伝える練習ができることがわかった。人のプレゼンを聞いて、ミスを直しあったりするの良かった。コメントを英語で言うのも良かった。</p>
良い点数をとる	U	<p>①テストで良い点をとりたかった時にやる気が出る。プレゼンした後に皆からもらえるコメントがありがたい。自分のダメだったところが、どんなところだったか気づかせてくれる。</p> <p>②毎回、文を訳していく時に、一文一文、英文を声に出して読んでから訳すので、良く理解することができた。読むことができない(発音できない)単語の意味を覚えるのは難しいため。高校の時から長文読解が苦手だったけれど、「主語を見つけて」とか「文の切れ目(接続詞とか)を見つける」ことで、読解がわかりやすくなった。単語の意味を調べるだけでなく、文章に合わせた意味を見つけなければ、調べたことにならないと理解した。</p>
	V	<p>①やる気はたくさんなかったと思うが、先生が最初に、英語の学習最後って言ったので、それは、あーっと思った。小テストで、みんなしっかり授業前に予習してるのを見て、私もちゃんとしようと思ってやった。テストで最初2点だったから、そのあとちゃんと勉強しようって思い、8点とかきたら嬉しかったので、それもやる気につながった。クラスみんなが発言したり、質問したりしてたので、そういう環境に刺激されたというのもある。このクラス大好き。あと先生が私たちのこと褒めてくれるので。</p>

良い点数をとる	W	①やる気が出たのは、少し勉強しただけで、小テストで良い点がとれた時、先生が、このクラスはやる気があるクラスだとほめてくれた時。 ②英語学習がなんとなく楽しく感じるようになった。今までは、英語の教科書を開くだけで少し憂うつだった。
達成感	X	①予習をちゃんとしていくと発言する機会が多くあって、自分が文法や意味の取り方で間違えると、その間違いについて先生が説明してくださって、クラスに貢献できた時。また、CDを聞いて、難しい英語の意味をより簡単な英語で説明することができた時。そして先生の「難しい英語をべらべら話すのではなく、みんながわかる言葉でわかりやすく伝えよう、話そうとすることが大事」という言葉。その「やる気」は今も続いている。「やる気」が無くなった時はない。 ②とても変わったと思う。上記にも挙げた先生の言葉で、英語はただ自分が理解していればいいのではなく、相手に伝わるのが大事であると思うようになって、簡単でも話そうとすることになった。話そうとすることに対する抵抗が和らいだことが、自分の中でとても大きい。
	Y	①予習して小テストで力が発揮できた時、予習したからこそ当てられなくても自ら訳や文法について発言できた時は、やる気につながった。しかし、勉強してきたのに小テストの出来が悪かったり、そんなに勉強してきてない人より悪かった時など、やる気をなくした。 ②この授業は、みんな仲がいいし、レベルの差がないので、わからないところは授業中たくさん質問できた。内容が異文化理解であるため、楽しみながら英語を学べた。去年は、1文1文いちいち文法や文のしくみを気にしすぎて、訳しながらも自分が何を読んでいるかわからなかったが、この授業で、単語をそのまま訳すのではなく、話に沿った訳をしていくうちに文の理解度があがった。
	Z	①授業中に本文の訳について、自分が思っていた訳と意味が違って、そこを質問した時、先生が「ちゃんと予習してきているから、そういう質問ができるのね。予習しないで、ただ座って聞いているのとは理解のレベルが全然違うでしょう！」と言ってくれたのが、自分のことを認めてもらえたように思えて嬉しかった。そしてそれが、また予習してこようという「やる気」につながった。他の課題などで忙しく、この授業の予習が追い付かなかった時、できていない自分が嫌で、「やる気」がうすれてしまった。 ②予習復習の大切さはわかっていたが、どうしても他のことでいっぱいになって、予習せずに授業に来ることが何度かあった。今までの私だったら、予習できてない、授業に出てもわからないし、もし当てられても答えられない、みんなに勉強してない自分を見られたくない、先生に何か言われるのもいやだ！と思って授業に来なかったかもしれない。それでも、このクラスでは、たとえ予習が追いついてないとわかっているけど、先生が責めたり、きびしく非難しないでくれたので、授業に出てできることをやろう、と思えた。加えて、クラスみんなが入学時から一緒ががんばろう、成長しよう、という思いをもっていたので、間違えることが恥ずかしいことではないし、どんどん質問して、発言していこうと思えたので、毎回の授業を楽しくむかえることができた。

### 7.3 調査結果 expert

このグループは、「授業に対する感想」としての自由記述であるが、「プレゼンテーションをすることによって力がついた」という記述が15件(38%)あった。「英語だけで行う授業の利点」や「学生同士も日本語を使わないことのメリット」について書いている記述も12件(30%)見られた。英語で行うグループワークやペアワークの良さも書かれていた。これらは、英語を使うことによって、学習意欲が高まることを示している。

表3. expert の調査結果

コード	学生	学生の記述
英語を使う	a	大学生活の中で、最も英語をしゃべろうとしているのは、この授業の中だ。普段から、努めて英語をしゃべる場があれば良いなと思っていたので、楽しく学べている。
	b	この授業を一番初めに受けた時、英語のみの授業と聞き衝撃を受けた。リスニング、スピーキング、ライティングのいずれに対しても苦手意識を抱えていたが、いくぶんかこの授業で克服できたように感じる。
	c	私は、この授業を受けて、自分の英語の下手さを身にしみて感じた。英文を読めても、何を言っているかを理解しても、それを自分の言葉で表現することの難しさを理解した。普段の生活から、英語を自分の言葉で書いたり話したりしなければ、英語は上達しないという気づきをもたらすことができた授業だった。英語で話すことが苦手でも、この授業では、できないことに寛容であるため、毎週楽しく参加することができた。私は今まで全出席の授業は一つしかなかったが、まさか4年生になって、自ら参加したいと思える授業に出会えるとは思っていなかった。英語での議論が、この授業で一番好きだ。元々議論は好きだが、言いたいことを英語で言えない難しさ、言えた時のうれしさが好きだ。
	d	授業形態は受けやすく、先生もわかりやすい英語で教えてくれたので、良かった。一切日本語を使わないのに、わかりやすく受けやすいこの授業は好きだ。英語を話すスキルを、もっと高めていきたい。特に、練習して話すスキルではなく、聞かれてその場で答えるスキルを高めたい。
	e	これほど英語をアクティブに用いることは初めてだったので、受験英語とは全く違う、生の英語の難しさを感じた。心の中で言いたいことがうまく口でできないもどかしさ！もっと話せるようになりたい。
プレゼンテーション	f	私がこの授業で一番得られた学びは、プレゼンにおいて大切なことは、相手にいかにわかりやすく自分の伝えたいことを伝えられるかということだ。文法や語法も大事だが、それよりも、自分なりに解釈して簡単なワードを使って表現することや、身振り手振り、アイコンタクトを使いながら、相手に伝わっているかを確認しながら伝えることが、一番大事だと思った。一方的に言いたいことを言うのでは伝わらず、双方向のコミュニケーションであることを意識しながらプレゼンしなければいけないことに気づいた。
	g	授業を通して、自分でプレゼンテーションする力と、他人のプレゼンテーションを聞いて理解する力が高まったように感じる。普段、英語を話す機会がない中で、この授業中に、その機会を得られるという意味で非常に役に立つ授業だった。
	h	少人数の授業なので、積極的に参加できた。グループワークやプレゼンテーションは、他の授業ではないスタイルだったので、とてもいい経験ができた。人前で話すことの難しさを知ると同時に、楽しさを知った。
	i	この授業で一番良かったのは、英語でプレゼンすることができたところだ。私は、人前に立って話すことが苦手だし、ましてや英語で、しかもほとんどしゃべったことのないような人たちの前でプレゼンするなんて・・・と最初は嫌という気持ち以外なかった。しかし、原稿を書く時も「どういう表現が伝わりやすいか」「この難しい用語をどうやって説明しようか」と考えたりすることが新鮮だったし、実際のスピーチの時もかなり緊張したが、「英語でプレゼンをした」という経験が、何よりも自信になった。
クラスの雰囲気	j	個人的に、このクラスの雰囲気の良さが私はとても好きだ。雰囲気が良いほうが、授業に活気が出て良いと思うので、先生が私たちに議論させたり、教科書を要約させたりしているのが、一役買っていると思う。
	k	雰囲気が良くて、みんなが自由に発言できるクラスだった。先生が発言を促してくれたので、授業中発言がしやすかった。

## 8. 考察とまとめ

調査結果を踏まえて、2点の研究課題について考えてみたい。

1) 授業において、学生が学習意欲を高める要因、学習意欲を下げる要因は何か。

予習をして授業での文法や内容がよく分かった時に学習意欲が高まること、またその逆に、予習ができなかったり、疲れていたりする時は、学習意欲が下がることが明らかになった。威圧感や不安を感じないことが、良い影響だったという記述は、Tarone & Yule (1989) が示している要因の一つである。テキストの内容に興味を持てると、先を読みたい気持ちになることも挙げられた。また、教師から褒められることや、クラスメートの影響で学習意欲促進につながるという結果は、Ellis (1994) の指摘とも一致した。

2) 英語能力の高いグループと低いグループで、授業において学習意欲が高まる要因は異なるのか。

novice と intermediate は記述式アンケートを実施したのに対して、expert は、授業についての自由記述と、形式が異なったため、比較しにくい面もあったが、共通する要因として、クラスの雰囲気の良いさが挙げられる。クラスの雰囲気が良いと、発言や質問がしやすくなり、学習意欲が上がるという好循環になるためだと考えられる。

「クラスの雰囲気」は先行研究では挙げていなかったが、アンケート調査の結果から出現した要因 (emerging theme) であった。クラスの雰囲気は、学習者の個人差が授業の中でクラスメートとかかわり合って作られる面もあると考えられる。今後の研究では、「クラスの雰囲気」が、学習者の学習意欲に大きな影響を与えるということに留意すべきだという示唆が得られた。

英語能力の高いグループと低いグループで、学習意欲が高まる要因として異なるものは、プレゼンテーションに関することであった。novice では、原稿を書いておこなうプレゼンテーションは、やりたくない学生が52%だったのに対して、expert では、授業中に英語を使うことや、プレゼンテーションをすることによって力がつき、学習意欲が高まるという結果が出た。これは、4人の外国語学習成功者についての調査 (Kojima 2008) で、「その言語を積極的に使おうとする」という結果と一致した。

授業についての学生の意識調査 (児島 2015) では、本稿の novice と同じ英語能力で同じ科目 (同じ曜日、時限、同じ学科構成) の学生グループが、原稿を書いておこなうプレゼンテーションを高く評価したが、今回は全く異なる結果だった。このことから、同じ英語能力のグループでも個人差 (individual differences) によって、学習意欲が高まる要因に差がある可能性、あるいは個人差によって作られるクラスの雰囲気が影響する可能性が示唆された。

以上のことから、授業において、学生の学習意欲を高めるためには、できるだけ不安を取り除き、「わかる」という経験を重ねて自信をつけさせていくことが重要だと考えられる。クラスの雰囲気の良いは、教師が作ることが困難な場合があるが、グループワークなどで親しみが増し発言しやすくなれば、クラスの雰囲気も良くなる可能性がある。

本稿執筆にあたり、学生の記述を書き起こしたことにより確認できたことがある。それは、特に intermediate のクラスの記述において、英語が苦手嫌いだった学生が、予習をして授業がわかる経験などからやる気が出てきた過程を、それぞれの個性的な書き方で表現した記録は、貴重なデータだということである。すなわち、このデータには、多くの英語の苦手な学習者にとって、示唆に富む学習経験、学習過程が示されている。様々な要因によって学習意欲が高まった結果、実際の学習も変化してきたことが明らかになった。一方で、学期の後半、時間がなくて教師が説明を急いだことで、学生がやる気をなくしてしまったことは、反省材料となった。

昨今、社会の風潮として、点数を上げることばかりがもてはやされ、注目を浴びる傾向にある。点数をあげることをキャッチコピーにしている語学学校ならまだしも、大学教育は、人間的にもっと深いアプローチを目指したい。すなわち、学生の学習意欲を高め、自律学習者 (autonomous learners) になれるような影響を与えることである。これは、点数のようにすぐには目に見えないが、一度学ぶ喜びを味わって、自律学習者になれば、一生続く能力であり、結果的に点数も上がるはずである。このことを実証する大学2年生の学生が、授業の後で自分の経験を話しにきてくれた。彼女の話によると、「中学、高校時代は、英語の勉強は和訳に力を入れていたが、大学1年の時の先生のクラスで、和訳はノートに書かないで、主語や動詞を見つけて意味を考えるようにと言われた。その学習方法で、ほかの英語の授業でも勉強したら、大学1年では能力別9クラスの中で一番下のクラスだったのに、2年になって4段階上のクラスまで上がった」ということだった。大学の教育現場で、学生に一生続く能力を与えることは、生涯教育 (lifelong education) につながり、根幹に働きかける教育であると考えられる。

#### 参考文献

- Cohen, L., Manion, L., & Morrison, K. (2000). *Research methods in education* (5<sup>th</sup> Edition). London: RoutledgeFalmer
- Crotty, M. (1998). *The foundations of social research*. London: SAGE Publications.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Dörnyei, Z. (1994) Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gardner, R.C. (1985). *Social psychology and language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.

- Grigorenko, E., Sternberg, R., & Ehrman, M. E. (2000). A theory based approach to the measurement of foreign language learning ability: The Canal-F theory and test. *Modern Language Journal*, 84(3), 390-405.
- Kojima, C. (2008). Symposium on language learner psychology. *IATEFL 2007 Aberdeen Conference Selections*. 119-123.
- 児島 千珠代 (2015) 授業についての Learners' beliefs と Teachers' beliefs に関する考察—学生の意識調査を中心として— 『言語教育研究』 第 7 号 1-17
- Krashen, S. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon Press.
- McLaughlin, B. (1978). The monitor model: Some methodological considerations. *Language Learning*, 28(2), 309-332.
- Skehan, P. (1989). *Individual differences in second-language learning*. London: Arnold.
- Tarone, E. and Yule, G. (1989). *Focus on the language learner*. Oxford: Oxford University Press.
- Williams, M. and Burden, R.L. (1997). *Psychology for language teachers: A social constructivist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.